



Nepal Blind Support Association

ネパールの視覚障害者を支える会会報

第19号 2007年10月 ネパールの視覚障害者を支える会 (NBSA)

NBSA : <http://nbsa.sakura.ne.jp/>

主内容：木下航志君の夏休み/活動報告/ネパールの働く仲間/ネパールよもやま話/ネパールトレッキングの魅力/ネパールの人々の心理的な特徴と、国際協力場面での対人関係の工夫/あの人は今/事務局だより

木下航志君の夏休み

夕焼け小焼けの赤とんぼ おわれてみたのはいつの日か

18歳の歌手木下航志君が、高校生活最後の夏休みを途上国のネパールで過ごしました。聴くもの触れるものすべてが新鮮であったことと思います。陰になって木下君を応援してくれた人々。特にサノティミ・キャンパスの視力に障がいのある大学生2名が、実行委員会になりキャンパス内での文化交流や学食でのランチ、コンサートの観客動員などをアレンジし大いに活躍してくれました。

写真左：学食のランチメニューはネパール式煮豆、ジャガイモのカレーとゆで卵。「案外いけました」とのこと



写真右：チャリティーコンサート 木下君を囲んだフィナーレのネパール民謡に、観客が思わず歌い踊り始めた

2007年8月21日、在ネパール日本大使館のホールで木下君はチャリティーコンサートを開催。客席120名のところ200名の観客が押し寄せ、立ち見が出るほどの大盛況。子ども時代の思い出を、軽やかに歌った日本の名唱歌赤とんぼや、しみじみと聞かせた竹田の子守唄。さらに盲目の天才歌手スティービー・ワンダーのヒット曲、リボン・イン・ザ・スカイやソウルフルに歌いこんだアメージング・グレイスには、客席からいっせいにウォーという絶叫が起こり会場を揺さぶった。同時に現地NBSA側からも出し物を用意し、女子学生の日本語によるサクラサクラの合唱、セミプロの盲人バンドによる新ネパール国歌や民謡などを披露した。

観客のほとんどが、夜間の外出の機会がめったにない寄宿生活を送る10代の盲学生で、誰もかれも心から楽しそうだった。コウシの歌声はヒマラヤを越え、全世界の人々に届くだろう。そして彼が私たちに見せてくれた友情は、ヒマラヤよりさらに高い。(ラム・チャンド/NBSA 弱視者ボランティア)

(写真撮影と本誌への掲載はモデルの許可を得ています)

NBSAカトマンドゥ 活動報告

定例のカセットテープ・ライブラリーや点字マガジンの発送のほか、こんな活動もしました。



7月28日：カトマンドゥの親の会ミーティング

参加者：60名 会場：PKキャンパス講堂

1年半前にカトマンドゥで結成された親の会のフォローアップ事業です。以来、個別に親同士は連絡を取っているようですが、情報も意見の交換も広がりをもたせません。地方の人々へのネットワークの窓口にまで発展できず、盆地内での温度差の調整に大変苦労しました。参加者の多くはお母さん、舵を取りたがるのはお父さんでした。

8月14日：ポカラで学童のクイズ大会と親への啓発セミナー開催

交通の便がよい観光都市ポカラにバイラワ、チトワン、サンジャ、バグルン、カスキ各郡から各2名の選手が結集。名門ポカラのアマルシン八中等高等学校を破り、僻地のバグルンの学生が優勝しました。その後、上記の郡から視力に障がいのある児童をもつ親各2名が参加した啓発セミナーを開催し、教育の必要性や親同士で情報を交換することの大切さ訴えました。セミナーの後に5人の親が役員に選出され、今後親の会のネットワークを築いていきます。広範囲の地域からやって来た田舎の親御さん達は、なかなか明るい感じで熱意が感じられました。

2007年9月15日：カトマンドゥ子供の日クイズ大会（投稿記事：谷川昌幸氏）

「NBSA 子供の日学校対抗クイズ大会」があるというので、こっそり潜り込んだ。会場はラーニポカリ前の古き良き Sanskrit University 校舎 (Darbar 高校)。参加生徒は8年生までの中学生。

ネパールの障害者の状況について知識はほとんど無いが、少なくとも数年前までは視覚障害者や身体障害者が一人で街中で行動しているのを見ることはまずなかった。おそらく家庭内に閉じこもっていたのだろう。ところが、最近は、車椅子や白杖で一人で行動している人を何人も見かけた。これは日本の現状と比較しても、大変な改善だ。まだまだ路上で物乞いする障害者が多数いるし、地方はおそらく手つかずだろうから、前途は多難だが、希望は持てる。

障害者支援については、物質的支援もさることながら、精神的エンパワーメントが重要なことを今日のクイズ大会で実感した。障害児は社会行動の場が少なく、人前での行動が苦手だ。そこで、クイズ大会など様々な機会を設け、発言、行動の練習をする。これにより、少しずつ社会行動になれ、自信をつけていく。白杖や車椅子などを贈与するだけでは、おそらく障害児は外に出られないだろう。社会性が身に付いていないからだ。だから、社会性の育成、つまり社会行動のソフトウェアの訓練、教育が重要となるのだ。これは大切だ。モノや建物のような派手さはないので支援を受けにくい、これからはこのような活動にこそ支援を拡大していくべきだろう。クイズ大会では、各校の視覚障害児たちが間違えても物怖じすることなく、自信を持って回答していたのが印象的だった。

(写真1)クイズ大会会場。(写真2)日本の学校から寄贈されたリコーダーが賞品になりました。(写真3)クイズ大会。



ネパールの働く仲間 盲学級の教師 ベードマヤ・ダカールさん

ベートマヤさんは、カトマンドゥの隣パタンにあるナムナ・マチンドラ学校の盲学級に勤務する傍ら、NBSAの隔月点字雑誌、タッチのタイプと編集を手伝ってくれます。盲学級は今年で4年目、彼女が教師の道を選んだ理由を聞いたところ、出身地のサンスリ郡には肢体に障がいがある者が就労するチャンスがまったくなかったため、とのこと。「学業でカトマンドゥに出てきてから、どうせ働くのなら自分と同様に障がいのある人のためになる事をしたいと思いました。それにナムナの学校に来てなんとなくほっとした面もあるのです。子ども時代、私の村には松葉杖がなかったので、どこへ行くにも本当に苦労しました。ネパールは身内、近親だけが職を得る仕組みになっていますので、就職口を捜すのが本当に大変だったけど、毎日子どもとのつながりが楽しいので、仕事に夢中です。いつも、子どもとの新しいコミュニケーションの方法を考えています」と、おっしゃっていました。



ネパールよもやま話 YAの失敗しちゃった ネパール - とらべる編 -

今から7年ほど前のこと。何とか簡単なネパール語会話はできるようになったが、細かいニュアンスなどわからず、言葉の問題で色々失敗した。ある秋の日、ポカラにバスで行く途中、猛烈にもよおしてきて我慢できない。田舎道を走っているの、運転手さんに一度どこかに止めてとお願いした。「ちょっと待てや、もうすぐドライブインだからね、ラモ(長いの)?それともチョト(短い)?」と聞いてくる。う~ん、わかんない!それでも、急いで、急いでと叫んだので、草が茂っているところにバスを止めてくれた。危機一髪!ひとつ勉強した。長く時間かかるか(大)、すぐ済むのか(小)と聞いていたんだ。まっさかゼスチャーで知らせるにもいかず、本当にあせった。

これも同じ頃の思い出。カトマンズからバスでダーズリンへ行ったときの話。延々16時間、到着したのはインドとの国境最東部の町カーカルピッタ。思わずトロリとしてしまいそうなのんびりした田舎町。インドの国境には誰もいない。私以外の乗客は全員フリーパスのネパール人。彼らに混じって入国審査も受けずに、そのまま国境を越えてしまった。ダーズリンが少々退屈だったので、どうせここまで来たんだからと、ついでにカルカッタまで行ってしまった。さて、金も尽きてきたのでこの辺でネパールに戻るかぁと、今度は汽車でネパールの国境ビルガンジまで北上した。この後大事件が起こった。ついにバレたのだ。あんたどうやってインドに入ったの?インドのビザをもっている、これではまるっきり不法侵入じゃないのと、かなり厳しく叱られ、もう少しで豚箱入り。ひたすら謝りに謝ったが、最後のせりふにグサリ。「あんた、いい年なんだからちゃんと法律守ってよ!」

* ネパールトレッキングの魅力 西村希志子

NBSA事務局の上田佳代子さんに「ヒマラヤを眺めに行かない？」と声をかけられたのは、十数年前のこと。やっと実現したのは2005年秋のスタディツアーでした。この年はマチャプチャレを眺めるコースを視覚障がい青年二人とサポーターが同行。杖一本とサポーターのガイドだけで山を歩き、爽快な空気を楽しむ視覚障がい青年達にたくましさを感じ、人間の感覚の神秘さを教えられました。

翌2006年秋は、残念ながらツアーは中止となりましたが、再び上田さんと数人の参加者とともにプライベートで行くことにしました。目的地はヒマラヤの絶景ポイントといわれているネパールのプーンヒル3210m地点。まずは関西空港からネパールの首都カトマンズへ、その後国内線でカトマンズの西方の町ボカラまで、さらに車で1時間ほど揺られた標高700m地点からやっと自分の足で高度をかせいでいきます。途中ロッジに4泊し、往路最後のロッジを朝5時に出発して1時間ほど登り、やっとプーンヒルに到着、日本を出発して7日目でした。

山が深いヒマラヤでは目的地までの距離が長いのは仕方がないことですが、現地ではポーターが荷物を持ってくれますので、日本での山歩きに較べはるかに快適でした。一般のトレッカーが歩くコースは現地の人の生活道路・生活空間で、裸足の子どもやサンダル履きの大人が軽々と荷物を担いで歩いています。その道物を々しい格好の外国人が歩く姿は奇妙な光景でした。でも、その外国人達は夜のロッジですることがなく、夕食後はロッジに現れた地元のダンサーと大騒ぎでした。

プーンヒルからは世界第7峰のダウラギリ8167mと第10峰のアンナプルナ8091mの山容が一望できます。到着したのは日の出前で好天に恵まれたので、太陽が昇るとともに山の頂上から赤味が差し、次第に真っ白で壮大な山容が姿を現し、その素晴らしさに、「もうちょっと、眺めていい？」と、時間を気にしているであろうガイドさんをお願いする始末でした。

ヒマラヤの緯度は奄美大島とほぼ同じ亜熱帯で森林限界は4000m。山中は亜熱帯気候と高度が入り交じり、村の庭先には春から秋の花、例えばカンナと桜とマリーゴールドと一緒に咲いていて、日本から来ると季節が混沌としてしまいます。プーンヒルまでの道も森の中を歩きます。驚いたのはシャクナゲの木です。日本では低木ですが、ここでは高木、それも10数m以上あり、群生しています。3月には一面に真っ赤な花が咲くとのこと。植物にあまり興味がない私でも見てみたいと思うほどの群生地でした。

途中、移動中のヤギの大群にも遭遇、ヤギ使いの男性によると2000頭はいるとのこと。ヤギ達は急斜面を転げ落ちることもなく、登ったり下ったり・ヤギもまたたくましい。そういえば、木から木へと飛び移るサルにも出くわしました。

ネパールに行ってエベレスト8848mを見ずに帰るのはもったいない話。そこで、早朝カトマンズ空港からの150US\$片道30分、10数人乗り飛行機のマウンテンフライトを利用しました。エベレスト付近は気流が悪いため、あまり近づくことができませんが、乗客を一人ずつコックピットに入れて、パイロットが山のガイドをしてくれました。目の前にある写真のままのエベレストの威容に、圧倒される思いでした。

いつまでも眺めていたいヒマラヤ山脈でしたが、現実の生活があるからこそ非日常のヒマラヤ山脈の壮大さを感じたトレッキングでした。

プーンヒルからのダウラギリ



夜のロッジで大騒ぎ



ヤギの大群



手林佳正 心理療法士・多文化間精神保健専門アドバイザー 在カトマンズ

ネパールには、青い空と段々畑状に耕された緑の山々の延長には真っ白なヒマラヤがあり、そしてその大自然のなかで生きる人々などがいて、日本人が好きになる外国のひとつだと思います。インターネットで日本からの旅行者たちの記録を見ると、ネパールの人々に「明るい、控えめ、穏やか、おっとり、自分から言わない、人なつっこい、感情を抑制しない、純粹、純朴、親切」などという印象を持つようです。

さて昨年11月、カトマンズ市内のチベット仏教の聖地ボダナートのホテルで南アジア精神医学会があり、ネパール人精神科医師に誘われて参加しました。ネパール人大学生とアメリカ人との心理検査比較や、疾病像の文化的な比較研究など、興味深かったです。その後、総務省の国際青年意識調査をネパールで追試された谷川昌幸氏の報告を、知りました。

それらの調査研究をばくなりにもまとめて考察を加えると、ネパールの人々の心理学的な特徴として、次のように言うことができます。

「現在の感情を罰として把握する傾向・訴えの仕方が強い・基本的に希望的・自分が目標を達成できると信じている・問題解決にひとつだけでなく、いくつもの方法があると考える・自分が解決する能力があると自信を持つ・不安が精神的に表されずに身体化して表現される・問題の原因を外在化しがちで他罰的で、自己の責任を回避する傾向・ネパールという国に誇り高いが、何に誇りを持っているなどとは分化していない・自国民を<勇ましく、平和を愛し、やさしいとみなしている・ネパールの3割の人々が不幸と表明」などです。

これらは、「万能感 omnipotent control を未分化に引きずり、それとバランスをとる自己防衛が強い」と言い換えることも可能です。万能感（全能感）とは精神分析の用語で、乳幼児期に始まる「全てが自分の思い通りにコントロールできるという感覚」を指し、自他未分離な特徴を持ちます。そして、この状態を臨床心理学的に促進するためには、「永遠に子どもでい

ることができないような体験、つまり現実実際に挑戦し、その結果を受け容れることが必要」です。一方、ネパールの自然風土や、歴史的な社会制度上の特徴などに、これらの根拠を求めるともできると考えるのです。山岳地が多く、他の地域との住民間の交流は少なかった。また行政が、広く人材を求めずに王家とその取り巻きたちによって独裁的専制的に長く行われてきた歴史、固定したカースト制などがあります。つまり、個人がチャレンジできる機会が、歴史的社会的に少なかったし、現在も民主化は糸口にとどまり、産業拡大も限定的な状況がある。

さて、この国で開発支援活動をしていると、ネパール人関係者が、「自分の失敗を決して認めず、謝ることもなく、言い訳する」ばかりであることに、ぼくたちは驚きます。それは上記の特徴をあわせて考えれば、「安易にできると考えて」引き受けてしまったからかもしれません。また、「できると言わなければ、その仕事を失ってしまうという、不安がある」のかもしれない。これは、フランツ・ファノンが植民地の心性として言及しているところでもありません。さらに、よく目にする「業務内の公私混同・遅刻・偉ぶる」などは、合理的な運営への不慣れさやプライドのゆえだと理解して、効果的な国際的な支援をする際の、よりよい組織マネジメントを求めて、ひとつつつ自覚を求めて対応すべきだと思われま

す。日本文化に浸ってきた私たちには、約束や時間を守ることは大切だし、また相手の反省の気持ちを見ることが大事だったりします。同時に、失敗場面で明確な指示をしないで、人間関係を悪くしたくないから当たり障りなくしておいて、「そのうちにわかってくれるだろう」と期待してしまう傾向もあります。ぼくたちは、自分のなかの日本文化特有の、ある種の「厳格さ」や「甘え・相互依存」を自覚し、ネパールに人々と活動を共にするときには、論理的に契約内容を明示し、相手に言葉で伝え、そして結果を評価することが大切だと考えています。

手林氏のボランティア歴：心理療法士。多文化間精神保健専門アドバイザー（多文化間精神医学会認定）。大学で心理学を専攻して高知県職員、精神保健福祉センター心理臨床担当。その後、英国で心理療法訓練を受け、群馬県太田市と都内の精神科病院で心理ソーシャルワーク室長やリハビリテーション部長、茨城大学講師(非常勤)など。富山県高岡市生まれ。1996年からは国際精神保健支援を志して、開発途上国に暮らしており、ブラジル・ウガンダ・カンボジア・ドミニカ共和国などで、JICAとNGOの双方からの駐在を経験。

こんにちは、私は1981年3月から2001年12月まで日本に住んでいた、ネパールの視能力訓練士です。視能力訓練士と言うのは、眼科の一般的な検査、例えば斜視、弱視、メガネ、コンタクトレンズ、視野などの検査をする人のことを言います。私はこの視能力訓練士という職業を日本の眼科医、今は亡き黒住格先生から紹介されて知りました。当時、ネパールでは視能力訓練士と言う職業はまだありませんでした。自分でもこれはどのような職業なのか、どんな勉強をするのか全然わかりませんでした。黒住先生に勧められてこの職業に興味を持ち、日本に行く決心がつかしました。カトマンドゥ市から一歩も出たことのない私に、いきなり日本という遠い国に行くチャンスを得、日本というすばらしい国を知ることができ、とても光栄でした。私が日本へ行った時はまだ18才でした。ネパールの高等学校を終え、短期大学を卒業したばかりの時です。日本語は1年間ネパールで勉強したので、会話はできていましたが、日本に行っても勉強しました。日本の短大を2年、専門学校1年と実習1年、計4年間学生生活を送りました。日本の短大を卒業し、国立大阪病院付属の視能力訓練学校を卒業。日本で国家試験に合格し、免許を獲得した後1度ネパールに帰国しました。この4年間、私を全面的にサポートして下さったのはアジア眼科医療協力会(AOCA)です。私はAOCAの皆様をはじめ、他の多くの方々に大変お世話になったことを、生涯忘れられないでしょう。帰国後、ネパールの眼科専門病院で仕事をしていたとき、再び縁があって、日本の病院で仕事をするチャンスを得ました。そして再び日本に行きました。始めは2年くらい、と思っていましたが、日本の病院は設備がよく、働きやすく、ついにこんなに長くなってしまったのです。日本は言うまでもなく発展した豊かな国です。それでも日本の方は仕事熱心で、責任感がとても強いと言う、イメージが私の頭の中にいつまでも残っています。病院でも、日本の方と同じように扱っていただきました。外国人として差別を受けたことはありませんでした。日本から戻り、今は眼科専門病院で無償のボランティアとして仕事を手伝っています。そのほか、翻訳と通訳もしていますが、15歳の娘と12歳の息子を育てているので、いつも忙しくしています。また機会があったら、今度は遊びで日本に行きたいと思っています。(頂いた原稿をそのまま載せました。漢字の間違いもなく本当に素晴らしいですね)

事務局だより

2007年度会費納入のお願い

会員の皆様方に会費の振込用紙を同封させていただきました。会費納入後に会報を受け取った方はご容赦ください。運営費のほとんどが、皆様方個々の会費によるものです。よろしくお願い致します。

ウォークマン人気者！引き続き寄贈をお願いします。

皆様のご協力を得まして、ウォークマン数台が集りました。これは学生に貸し出し、授業の補助教材にしています。それでもまだ台数が足りません。ご不要になった録音機能付のウォークマンがありましたら、下記住所の日本の事務局までご送付お願いいたします。

Nepal Blind Support Association (NBSA)

Yoriko Atsumi P.O.Box: 8974 PCN-111 Kathmandu, Nepal

Tel: 977-1-4425-709 E-mail: yorikonepal@hotmail.com

【日本の事務局】

〒890-0064 鹿児島市鴨池新町 27-1-1108 上田佳代子

Tel & Fax: 099-258-6685 E-mail: office@nbsa.sakura.ne.jp

NBSA HP: <http://nbsa.sakura.ne.jp/>

維持会費：個人会員年間 6,000 円 / 法人会員年間 15,000 円

振込先：郵便振替 01790-7-74222 (ネパールの視覚障害者を支える会)